雪降る日は・・・

みゆ貴茂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
雪降る日は・・・

【Ｎコード】
Ｎ９５７９Ｄ

【作者名】
みゆ貴茂

【あらすじ】
雪の降る日―――それは嬉しくも物悲しい。だから君と二人で寄り添おう。

「雪は嫌い――――」
彼女は静かにそう呟いた。
そっと僕から目をそらして。

三月も終わりにさしかかったその日、忘れ咲きのような雪が降った。

年のわりに幼い僕は、その思いがけない天からの贈り物に感激してはしゃいだ。
僕がはりつく霜も気にせずに、窓に顔をつけて彼女を呼ぶと、
彼女は寂しげにそう呟いたのだ。

「どうして？」
僕は彼女に訊ねた。

彼女はソファーの背もたれに肩を寄せ、窓にそっぽを向いている。

「普通じゃないことって、ちょっとわくわくしない？
台風の日とか、雷の日とか。
そりゃ、忙しく働いてる人にとっては迷惑かもしれないけど」
僕は彼女の横に腰を下ろしながら、彼女の顔を覗き込んだ。

彼女はすました顔をしている。

「ねぇ？」

「……」
彼女はだまったまま宙を見続けた。
「ココアでも入れようか」
僕は暖房の設定温度を強めて、自分と彼女の分のココアを入れる。
「はい」
僕が彼女の分のココアを差し出すと、
彼女はゆっくりと振り返ってそれを受け取った。
「ふぅ」
僕はココアを口にして思わずため息をする。
返り咲いた寒さに、ココアの甘さが体にしみる。
彼女も暫く無言でココアを飲んでいた。
「溶けるから」
「えっ？」
突然の彼女の言葉に思わず僕は聞き返す。
「雪が溶けてなくなるから嫌いなの」
「……」
彼女はそれ以上何も言わなかったけど、僕には彼女の気持ちがなんとなくわかった。
「ふふ」
僕が小さく笑うと、
彼女は『バカにしてるの！？』と言いたげに僕を睨んでくる。
いつも大人びて見える彼女のそんな一面を垣間見ることができ、
僕は改めて彼女を愛しいと思った。

「確かに、雪が溶けてなくなるのは僕も嫌いだな」
「……」
「溶けかけた雪だるまとか見るとさすがに、物悲しいし」
僕はそっと彼女の手を握った。
「でもさ、雪が溶けたら春になるよ。
そしたら、一緒に桜を見れる。
桜が散ったら、海へ行こう。
秋には紅葉を見て、おいしいものいっぱい食べる。
そしたらまた雪が降るから、一緒に見よ？」
「……」
彼女は黙ったまま僕の手を強く握り返す。
「ばか……」
彼女は僕の肩に頭（こうべ）を預けた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9579d/

雪降る日は・・・

2010年10月11日02時29分発行